

<2004年1月>

『兵は凶器なり』 - 15年戦争と新聞

1926 - 1935

前坂 俊之

(静岡県立大学国際関係学部教授)

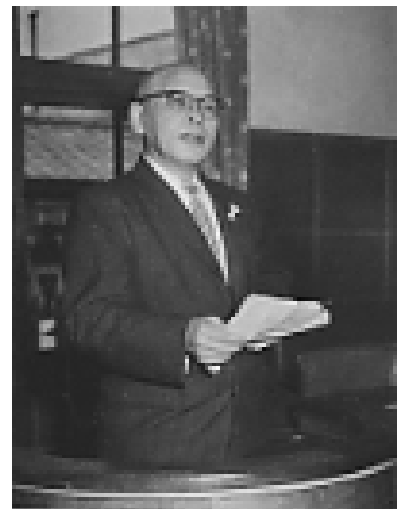
まえがき

人生にはさまざまな出会いがある。一九七四(昭和49)年夏、冤罪事件との戦いに生涯をかけた正木ひろし弁護士(1896 - 1975)に会ったのが、この本が生まれるきっかけとなった。

勤務地の呉から上京し、中央線・市ヶ谷駅からほんの目と鼻の先にあった自宅を訪ねた。壁全体をツタがおおい、今にもくずれそうなオンボロ二階建て。こんなボロ家で、と思わず胸が熱くなった。

冤罪事件の八海事件を取材するための訪問であった。二階に上がると書斎があり、その入口には空襲警報発令中という看板が掲げてあった。部屋に入ると、所狭しと積み重ねられた本や資料の間に、天井からクサリが二本つるされていた。

「これ何と思う。こうやるんだよ」といきなりクサリにぶら下がり、グルリと一回転したのには度肝を抜かれた。正木氏はこの時七十八歳である。こちらはヒヤヒヤしているのに、「体を鍛えるんだ」と意気軒昂であった。若々しく、顔にはツヤがあり、血色もよく、情熱がみなぎっていた。



正木ひろし弁護士

八海事件の取材が一段落した時、奥に引っこんだ先生はしばらくして「これを記念にあげるよ」と一枚のプリントを私にくれた。茶色っぽく変色したガリ版ずりの「近きより」であった。

正木氏が戦時下に独力で個人誌「近きより」を刊行し、体を張って言論抵抗したことは知っていたが、まさか、そんな貴重なものが残っているとは思ってもみなかった。

よくみると、敗戦の日、昭和20年8月15日の手書きのガリ版ずりであった。これを読んだ時の感動は今も忘れられない。

敗戦日本

日本は降伏した
神の審判は厳に下ったのである
敗北して尚お生存を続けているのは
宏大無辺なる神の恩寵である
神が日本民族絶滅一步手前に
一度反省の機会を与えたのである
もしこの恩寵を理解し得なかったならば
直ちに 恐るべき最終の審判！
民族絶滅へと移行するであろう
罪悪の国 日本！
遠き野蛮未開の時代は知らず
中世以後において 日本ほど
愚昧にしてかつ悪徳の国があったろうか
(「近きより」昭和20年9月号)



新聞社に入って以来、常に私の心にあった問題は「なぜ、国民やジャーナリズムの間に戦争への抑止力が生まれなかったか」ということである。正木弁護士に会い、「近きより」を直接、手にし、目を見たことにより、これが一挙に具体的なテーマとなった。

正木弁護士の戦時中の日本人についての持論は「日本は今だにルネッサンスを迎えていない」「日本人家畜論」である。言葉は激烈だが、昭和天皇が重体になって以来亡くなるまでの国民や各界、ジャーナリズムの反応をみると、この言葉は今も重みをもって迫ってくる。

「過去に目を閉じる者は現在に対しても盲目となる。非人間性を思い起こそうとしない者は再び新たなる伝染の危険に感染しやすくなる。……私たち年長者が若い人たちに与えるべきは夢の実現ではなく、誠実さです。歴史の真実を直視できるよう助力しなければならぬ」 - これは1985年5月8日、西ドイツのワイツェッカー大統領が同連邦議会で終戦40周年にあたって演説した言葉である。

ナチスのユダヤ人虐殺についても「罪がある人もない人もみんな過去を引き受けなければならぬ。5月8日は出来事について誠実かつ純粋に思案する想起の日」と訴え、国民に大きな感動を与えた。

苦い過去を直視し、ナチスの責任を徹底して追及する西ドイツと、過去を水に流し忘却の彼方においやるわが国とは天地の差がある。国際社会での中の日本を考える時、この習性が隣国からいつまでも警戒をもって見られることは言うまでもない。

特に問題なのは、ジャーナリズムもこの忘却病に深く冒されていないか、ということである。日々、現代史を記録している新聞は過去を不断に検証することなくして、現在をよりよく把握することはできない。

本書の内容は十五年戦争のエポックとなった各事件を新聞はどう報道したか一をできるだけ客観的に当時の資料や証言をもとに再現したものである。

過去に学ばないものによりよき未来は開かないーそんな思いを込めて本書を10年以上もかけてコツコツ書いたが意余って力足らずの感が深い。

本書の記述について説明する。

戦前、『朝日』は『東京朝日』『大阪朝日』、『毎日』は『東京日日』『大阪毎日』の2本立てとなっており、紙面建てや社説は別々のものが載っている。また、『朝日=毎日』とも大阪本社が中心であったため、『大阪朝日』『大阪毎日』の社説、論説に重点を置いて紹介した。

社説や記事の旧かなづかいは読者に読みやすくするため現代かなづかいに改めたことをお断わりしてきたい。一部、文中に　　や××があるのは検閲によって伏字になったものだが、当時の言論統制の実態を知ってもらうためにそのままにしておいた。

引用については「」で括り出典は巻末に列記した。なかには聞き取り資料もあり、前後の関係から発言・表記の主体を明らかにしてある。また、本文の流れに即して理解しやすいよう要約した部分もあり、すべてが原文引用ではないことをご諒解いただきたい。

本書は月刊誌『スコミ市民』に発表したものなどに大幅に加筆した。編集長の安孫子誠人氏、中奥宏氏に深く感謝する。

『大阪朝日』の満州事変前後の動向については後藤孝夫氏の『辛亥革命から満州事変へ - 大阪朝日新聞と近代中国』(みすず書房)に全面的によった。

後藤氏は私の取材に心よく応じて下さり、的確なアドバイスをいただいた。他に、楠山義太郎氏、古谷綱正氏ら数多くの先輩から貴重な話を聞かせていただいた。有難うございました。

本書の題である「兵は凶器なり」は明治のベストセラーである日本海海戦の戦記『此一戦』の冒頭部分からとった。これを書いたのは反戦・平和主義者で海軍大佐・水野広徳(1875 - 1945)。

昭和の戦前の歴史で、反軍・反戦のジャーナリストは本書でも紹介した菊竹六鼓、桐生悠々ら何人かいるが、海軍大佐という要職にまでついた人物が、百八十度転換して「日米戦うべからず」「戦えば必ず敗れる」と訴えた例はない。

『此一戦』の冒頭部分は「兵は凶器なり、元(これ)を悪(にく)むも、やむを得ずして之を用うるは是れ天道なり」とある。昭和の戦前は正しく、「兵は凶器なり」の歴史であった。

最後になったが、社会思想社の合志太士氏はペンの進まぬ小生を励まし、かけ回って資料を集めて下さった。感謝します。

1989年8月1日

前坂 俊之

<http://www.u-shizuoka-ken.ac.jp/~maesaka/maesaka.html>

< 禁無断転載 >